

研究紀要

# くらしをひらく子ども

——一人ひとりの思いや考えが生きるために——

1994

島根大学教育学部附属小学校

## 本校の教育実践研究の展開

### — 序にかえて —

平成5年度から、研究テーマが変わり、「くらしをひらく子ども」となった。本研究紀要は、この1年間の第1年次としての成果をまとめたものである。

研究テーマを変えることは、研究史にエポックを画することにもなるという意味で、決断と勇気を要することであった。これまでの研究・実践の伝統と蓄積に基づきながら、新しいスタートとしていけたらと思う。

テーマをめぐって、あれこれ検討していると、本校の研究史をひもとくかざるを得なくなる。

昭和22年、戦後の新教育のスタートと同時に、本校は、近藤正樹先生を主事（のちの校長）に迎え、コア・カリキュラムを展開する。「生活が陶冶する」を教育の原理とし、「生活によって生活にまで」こそ、教育の本来の姿であるとして、「生活」を新教育のカリキュラムの中核にすえる。従来の「生活」概念をとらえなおし、子どもの生活における「行動性」や「社会性」を重視している。今、この時期の研究がどう進展したかに注目することは、再び重要になってきているといえるだろう。

近藤先生の指導のもと、本校の第1著書と呼ばれている『近代学力—その性格と形成—』が出版されたのが、昭和35年である。世は、系統主義の学力観が強まる中であって、学力と学習の不離一体が主張され、その主体的・社会的条件が強く凝視されている。この時の多角的な学力論と「生みつくる」学力観には、学ぶものが多い。

昭和44年の『追求する力を育てる教育』、同47年の『子どもの追求力と授業』（近藤監修）の第2・3著書は、本校の教育観・学力観を「追求する力」「追求力」に託したものである。特に、子どもと課題とを両極とする「二極構造論」が、学習の原型であるとする考え方が確立・定着する。この「二極構造論」こそ、本校の研究の基本として流れているものといえるかもしれない。

研究テーマとしての「追求する力」は、昭和50年代にもひき継がれて、同58年から「子どもがつくる授業」へと移行していく。同61年に『子どもがつくる授業』、平成元年に『子どもがつくる授業と新教育課程』（以上、全て明治図書刊）が出版される。この期の大きな特色は、「場」と「支え」という概念が形成され、実践に定着していったことであろう。

今、平成時代に入って、学力観だけでなく、教育が根本的に問い直されている。確かに今、教育を変えなくてはならない。

今春、近藤先生が81歳で逝去された。昭和20・30・40年代を中心に、本校の教育実践研究の基礎をつくり、発展に苦心いただいた先生である。ご冥福を祈ると共に、これまで築かれた伝統と蓄積をふまえ、一層の拡充と深化をはかり、新しい地平をきりひらくことを、一同強く心に誓わなければならないと思っている。

平成6年6月16日

学校長 有馬毅一郎

# 目 次

序にかえて	学校長 有馬 毅一郎	
I 暮らしをひらく子ども		1
－ 一人ひとりの思いや考えが生きるために－		
II 教科における授業の構想と実践		
国語科	子どもが「読み」をつくる授業	5
－ 思いを「ことば」で表現するために－		
社会科	子どもが問題意識を発展させていく授業	23
－ 子どもの見方・考え方をどう広め、どう深めていくか－		
算数科	子どもが数理を追求していく授業	35
理科	子どもが自ら自然を探究していく授業	47
－ 子どもの見方や考え方をさぐる－		
生活科	子どものくらしが広がる生活科の授業	59
－ 一人ひとりの思いや願いが表出できる体験活動を求めて－		
音楽科	子どもが感じたことを豊かに表現できる授業	67
－ 一人ひとりが心を開いて表現するために－		
図工科	個性豊かな表現を生み出す授業	75
－ 思いをふくらませる－		
家庭科	くらしを見直し、よりよいくらしをつくり出す授業	88
体育科	子どもがイメージをふくらませ、表現する体育学習	94
－ 子どもがイメージを動きにしていけるために－		
特殊教育	子どもたちが楽しむ学校生活	111
－ 一人ひとりがその子らしさを発揮できる環境づくり－		
保健	子どものくらしに生きる保健指導	128
－ 子どもの思いを大切に健康生活の実践力を育むために－		
おわりに	副校長 春日 一 男	
研究同人		

# I 総論

## くらしをひらく子ども

— 一人ひとりの思いや考えが生きるために —



## 個性豊かに自己を表現する姿を求めて

— おわりに —

「教育は人なり」と言われるように、学校教育の成果は、実際に指導に当たる教師の資質・能力に負うところが大きい。正確にものごとを見る訓練をおろそかにしている人が、はたしてよい教育をすることができるであろうか。大自然と遊ぶ楽しさを知らない人が、人の心をとらえて教育することができるであろうか。子どもを教育するということは、何も教室だけで行われるものではない。教育の場は、日常の暮らしの中にもあり、その人の生きる営みの中にあると言える。

子どもたちの日頃のくらしの中では、いろいろな出来事が起こっている。一学期の初めの頃、掃除の時間にその様子を見ていた私に、雑巾がけをしていた2年生のA子が突然私を見上げ、次のような言葉を発した。「お・お・き・な、お・し・り」。その瞬間、「ええー」という言葉が私の口から出た。すかさず、A子は、「ゴリラみたい」と、さりげなく言った。A子は悪気のない、しかも、くったくのない言い方であった。そのA子の言葉に対して、私の気持ちは、そう悪いものではなかったのが不思議であった。きっとA子の気持ちは、副校長先生に近づきたい、友だちになりたいと思っていたのではなかろうか。子どもどうしても、子どもと大人でも自由に発言できるという雰囲気大切である。私たち教師は子どもたちが自由に発言できる場を保障してやらなければならない。

私たちは、願う子ども像として、「さまざまな事象に対して自分の力を出し切って、目を輝かせて生き生きと取り組む子ども」の姿を求め続けている。それは豊かな心をもち主体的で追求力・行動力のある子どもであり、学習や遊びなどくらしのあらゆる場面において自ら学ぼうとして取り組んでいる子どもである。私たちは、このような願いに基づき、常に知的なものや情意的なものとの統合をめざしながら、「たくましく追求する子ども」の育成を願っている。

子どもが追求対象や課題と出会い、対象に関わりをもつことから追求が始まる。課題意識（問題意識）は、教師が意図的にもたせるか、子ども自らが発見するか、いずれにせよそれは子どもの追求の中で常に意識され、明らかにされていくものである。このように追求対象や学習課題に対して子どもたちが興味・関心を持ち、主体的・意欲的に息の長い追求を推し進めていくために、教師は子どもの活動しやすい環境づくりや支援を吟味し、学習場面にあったさまざまな方策を考える。その方策が子どもに機能していくことで、子どもの思いや考えは多様になったり、質的な高まりや深まりをみせたりするものである。

本年度は、学習課題に対して一人ひとりの思いや考えを何らかの方法や目に見えるものとして表現させることに重点をおいた。私たちは、学習の中で一人ひとりの子どもが「話す」「書く」「描く」「作る」「演奏する」などの手段で、ダイナミックに、豊かに、多様になど、個性あふれる表現をしていこうとする姿を求めている。学校生活（特に授業）においては、集団の中で一人ひとりが生き、自らの力を出し切ることが「心を開き、自己を拓いていく姿」と考える。つまり、子ども一人ひとりが、しっかりと自己を表出したり、自分なりの表現をしたりしていく中で、その思いや考えを発展させ、強化させていくような授業を構想し、継続することで、「豊かに自己表現できる子ども」を育てたいと考えている。

終りに当たり、この紀要は昨年度の実践をまとめたものであることをおことわりしておきたい。諸賢の温かい、しかも厳しいご批判、ご叱正を切にお願い申し上げます次第である。

平成6年6月16日

副校長 春日 一 男

## 研 究 同 人

(平成 5 年度)

学校長	有 馬 毅一郎	副 校 長	春 日 一 男
教 頭	瀧 野 一 夫	研修部長	岡 田 正 樹

国 語	岡 利 道 昌 子 佳 広	瀧 哲 朗	
-----	------------------	-------	--

社 会	赤 木 直 行 吉 崎 朗	奥 村 忠 孝	
-----	------------------	---------	--

算 数	山 崎 敦 史 川 上 宜 久	原 一 夫	
-----	--------------------	-------	--

理 科	和 泉 浩 行 原 啓 一 朗	高 橋 泰 道 仙 田 み ず え	
-----	--------------------	----------------------	--

生 活	赤 木 直 行 中 村 治 子 昌 子 佳 広	酒 井 謙 司 瀧 哲 朗	
-----	-------------------------------	------------------	--

音 楽	岡 田 正 樹 山 田 祐 子	中 村 治 子	
-----	--------------------	---------	--

図 工	瀧 野 一 夫	陶 山 弘 志	
-----	---------	---------	--

家 庭	黒 崎 淑 子
-----	---------

体 育	中 筋 幸 夫 若 槻 尚 美	酒 井 謙 司	
-----	--------------------	---------	--

特 殊	中 路 博 孝 奈良井 正	西 島 博 貴 谷 千 里	
-----	------------------	------------------	--

保 健	原 田 睦 子
-----	---------

この研究紀要に収録されている授業記録は、次のような約束にもとづいて記載されています。

┌ 女兒を表す (男児はなし)

60 黒崎 直列つなぎは、線が、1 すじになっていて、並列つなぎが 2 すじになっている。

┌ その時間の発言の通し番号を表す



---

平成6年6月10日 印刷

平成6年6月10日 発行

発行所 島根大学教育学部附属小学校  
〒690 松江市大輪町416の4 (TEL21-2471)

印刷所 黒潮社  
松江市向島町182の3 (TEL21-3409)

---